

キプリングの越境の詩学

— "Bertran and Bimi" にみる混淆の文化表象 —

上 石 実加子

目 次

- 1. はじめに
- 2. 混淆のマレー表象
- 3. 動物園という文化装置
 - エデンの園の再生 -
- 4. 東南アジアにおける
 - 「オランウータン」の修辞学
- 5. <ペット>という制度性
 - 愛玩のパラドクス -
- 6. むすび

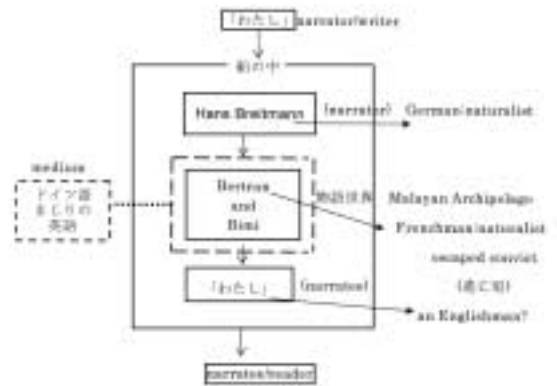
1. はじめに

キプリングの「ベルトランとビミ」"Bertran and Bimi" (1889) は、語り手「わたし」が、ドイツ人のハンス・ブライトマンから聞いた「ベルトランとビミ」についての話を語る枠物語の形式で書かれた物語である。英語話者の「わたし」は、マレー諸島のどこかで捕獲されて檻に入れられた野生のオランウータンと共にイングランドに向かう船の中にいる。

テキストにおいて、話を語り、また、語られる話の中に出てくる登場人物はいずれもナチュラルリストである。19世紀の博物学者がまさにそうであったように、生き物を射殺しては標本化して売買することを生業としているハンス・ブライトマンと、一方で、オランウータンという類人猿と一つ屋根の下で共同

生活を営むベルトランの在り方は、物語内に、動物に対して対照的な態度を示す2人のナチュラルリストが描かれているとあってよい。

ハンス・ブライトマンがドイツ語混じりの英語で語る「ベルトランとビミ」のエピソードがテキストの3分の2を占め、ブライトマンの話は、彼自身の体験談というよりも、彼がマレー諸島で出会ったフランス人のベルトランという男についての話になっている。以下がラクストの構造を図式化したものである。



ブライトマンが客観的に「わたし」という傍観者的な語り手兼聞き手に語る物語の枠に、「ベルトランとビミ」が挿入されるこの入れ子構造は、オランウータンのビミと共同生活するベルトランの話がブライトマンの語り封じ込められていることを意味しており、ゆえに「わたし」とブライトマンを「もつとも

キーワード：越境，混淆，見世物，オランウータン，ペット

らしい」存在の位置に押し上げ、ベルトランとビミの話が、「驚くべき」話であることが、まずもって構造的に身振りとして分類されているかのようである。

我々読者が、このテキストにおいて最初に出合う記号はタイトルの "Bertran" である。この表記は読者にきわめて言語意識を強制する記号である。というのも、「ベルトラン」の表記 "Bertran" は、きわめて不自然な綴りだからである。フランス人 "Bertran" の名前は、「現代において」は "Bertran" という綴りは存在せず、「ベルトラン」と発音する名前の表記は "Bertrand" となり、語尾に "d" のスペルが入るものしか存在しない⁽¹⁾。ブライトマンの話すドイツ語混じりの英語を、ある意味で書き取っているレベルにもある「わたし」は、そのドイツ語と英語が混淆した音を忠実に文字化しているといえる。ゆえに「わたし」は英語のほかにドイツ語の知識があり、さらに彼の口にするフランス語も正確に表記されていることからフランス語の知識も有しているといえる。しかしながら、ハンス・ブライトマンを "Hans Breitmann" とドイツ語式に綴ることができる「わたし」が、ベルトランを何故 "Bertran" と綴っているのか。ブライトマンの発音をそのまま文字化しただけなのか、あるいは作者キプリングによる単なる誤植なのであろうか⁽²⁾。

「ベルトラン」と発音する名前を "Bertran" と綴る例は、実は中世の時代に見出せる。中世においては、「ベルトラン」は馴染みのある名であった。「ベルトラン・ド・ボルン」"Bertran(d) de Born" というトルバドゥール の名声によって広く普及し、綴りは "Bertrand" と "Bertran" の両方が存在した (Hanks and Hodges, 48)。「Bertran(d)」という名前は、古ゲルマン語、中高ドイツ語の「ワタリガラス」を意味する語 "berht" と「輝かしい」を意味する語 "hramn" が合成された "Berhthramn" を語源とする "Bertram" から派

生したものであり (Cherpillod, 56), "Bertran" が語根であるとする説もあることから (Dauzat, 40), もともと "Bertran" という "d" のない綴りは、語尾が "-and", "-ant" となる現在分詞形の影響のもとに、民間語源説によって "Bertrand" という "d" が入った綴りに一般化されたとされている。テキストにおける "Bertran" の表記が誤植ではないとするなら、この名前の記号性は、ベルトランという男の不可解なアイデンティティ、およびその移動性をすでに予示しているかのようだと読める。

本論では、この問題を、テキストにおけるさまざまな越境性を表象するものとして解釈していく。そしてテキストの構造においては、本来「驚異」であるはずだった「ベルトランとビミ」の挿話が枠の「もっもらしき」と奇妙に同化してくるさまを、19世紀の混淆的文化の表象とともに以下に考察していきたいと考える。

2. 混淆のマレー表象

物語の「現在」は、イギリス人らしき「わたし」が乗船しているイングランド行きの船中である。年代は明確にされていない。この船のなかで「わたし」が出会うドイツ人ハンス・ブライトマンは、1879年から80年にかけてマレー諸島で博物学的標本の蒐集につとめたナチュラリストである。よってブライトマンの回想している物語の「現在」は、1879年もしくは1880年から、このテキストの執筆年である89年のあいだと想定される。また、ブライトマンが話す「ベルトランとビミ」についてのエピソードは、フランス人ナチュラリストのベルトランが、マレー諸島にやってきて、ビミというオランウータンと一緒に暮らすことについての一部始終である。ベルトランとビミとの共同(同棲)生活が12年にも及ぶものだったことが言及されていることから、ベルトランがマレー諸島

にやってきたのは、少なくとも1868年以前ということになる。

1860年代から1889年にいたる時期のマレー諸島は、ヨーロッパ諸国による植民地争奪戦の舞台であった。ことに1870年以後は、東南アジア諸国への西欧の進出が、きわめて明確な形をとって進められていった。イギリスは全ビルマを支配下におき、その保護権を、マラヤ半島から北ボルネオにまで拡大し、オランダは全スマトラを最終的にその東インド領に加えていた。フランスはといえば、1860年以降、東南アジアへの舞台へ再登場して、インドシナにおける近代的植民地開発の基礎を築いている。

マレー諸島における植民地状況は、サラワクと北ボルネオというボルネオの一部と、マラヤ、シンガポールといったイギリス領を中央において、その北にはフランス領インドシナ、その南東から南西にかけて、オランダ領東インドが横たわっている構図となる。

東南アジアの一地域に、主要なヨーロッパ勢が現出してくるという状況、これはとりもなおさず当時の植民地的コンテクストを如実に反映した表象であるということができよう。またマレー諸島じたいを言語的にみても、"Malay Archipelago" の "Malay" はオランダ語起源であり、原義が "emigrants" つまり「移住民」を表わす語であること、さらに当然のことながら歴史的にみても、マレー諸島じたいがかってそれ自身で完結した一つの単位であったことのない、つねにそれ自身よりも大きい何ものかの一部分であったという事実を考えても、<マレー諸島>という記号が人種の混淆地帯という意味を帯びている。

He [the orang-outang] had been caught somewhere in the Malayan Archipelago, and was going to England to be exhibited at a shilling a head. (Kipling, *LH* 269) (下線引用者)

「わたし」とハンス・ブライトマンが話をする現場は、オランウータンが1人当たり1シリングで「見世物にされる」ためにイングランドに向かっている船の中である。19世紀末まで、ヨーロッパ人の広汎な関心と衝動を掻き立てるひとつの社会現象というべきものを形成してきた娯楽産業は、オールティックによって「見世物」(exhibition)として定義された。彼によれば、見世物とは演劇以外の娯楽興行で、原則として金を払って見る、絵画、物品、「人間を含む生物の展示」(Altic, 15)のことである。テキストに示されているオランウータンのような動物を「見世物」にすることから連想されるのは、例えば1851年のロンドン万国博覧会から1889年のパリの万国博覧会にいたる一連の「展示会」であろう。こうした博覧会は、民俗学的集落を切り取ってヨーロッパの中にそれを再現して見せた、他民族の分類学的尺度をヨーロッパの人間に対して可視化してみせる特異な記憶装置として捉えられるべきものである。

植民地の多数の住民たちを博覧会会場に連行し、博覧会の開催中、彼らを柵で囲われた模造の植民地集落の中に展示しようというその人間展示ジャンルは、地球上で発見されるすべてのものを<記号>として配列していこうとする植民地主義的蒐集熱が、ヨーロッパ精神に巢食うグロテスクな欲望と解釈されるものである。

動物を見世物にするといえば、考えられるのがサーカスや動物園であろう。イギリスにおいて、1827年にはじまるリージェントパーク動物園も、1825年の動物学会の設立により娯楽というよりも研究を目的として始まった。開園以来、学会員から全住民へと広がりを見せる動物園の人気は、「動物園はいちばん人気のある展示場」とする1870年1月4日付けの『デイリー・テレグラフ』の記事に明らかである。「ベルトランとビミ」

のハンス・ブライトマンがベルトランと遭遇するのは、ちょうど1879年か80年だとテキストにある。動物園が大衆娯楽として盛り上がりを見せている時代と時を同じくしている。

ロンドン動物園がオランウータンを入手したのは1837年、その雌のオランウータンは暖房の効いたキリンの小屋に入れられ、ジェニーと名付けられる。彼女は冬を生き抜いて展示された最初のオランウータンであった。次のオランウータンも同じくジェニーと名付けられ、ヴィクトリア女王に拝謁する。女王は、上手にお茶の仕度をし、命令には従順に従うこのオランウータンが「ぞっとするほど、胸が痛くなるほど、不愉快になるほど、人間であった」という感想を述べたといわれている(Raby, 182)。1838年1月13日付けの『ミラー』誌に掲載されたジェニーは、洋服を着せられ、右手に果物を持ち、左手で何かを飲んでいる。この姿にもはや野生のオランウータンの面影はない。1851年には、チャールズ・ウォータートンという博物学者が、許可を得て、ロンドン動物園に来たオランウータンの檻に入っている。オランウータンとウォータートンは、「互いの人柄を探り始める」べく、目を合わせ、触れ合い、互いの首に腕を回している(Raby, 183-4)。

19世紀になって動物にも感覚能力があることが次第に認識されはじめると、動物保護運動がイギリスを中心におこってくる。類人猿の研究に伴う人間と動物の身体的類似は、動物愛護の重要な論拠となり、加えて、快楽を求め苦痛を避ける功利主義的道德がイギリスを支配することによって、人びとは、動物の「痛み」という感覚にきわめて敏感になり、動物に対する同情心を抱きはじめ、感情移入をするようになってくる。その結果、1876年にはイギリスで動物虐待防止法案を成立せしめたほどである(ターナー、20-2参照)。

しかし、不愉快になるほど「人間に似てい

る」と感想を述べた女王は、動物を人間と同一化する視線でオランウータンを見ていたわけではない。なぜならサルは、人間に似れば似るほど、不穏な存在となり、動物に人間が、あるいは人間が動物に似ていれば似ているほど、人間にとっては嫌悪感を抱かせるものとなっていったからである。「半人間」や「半動物」といった曖昧な存在は、どちらも人間的な部分を含むが、そうではない部分が同時に顕在化され、境界線上に位置する曖昧さが人びとに不安を掻き立てたのである。

3. 動物園という文化装置

—エデンの園の再生—

ハンス・ブライトマンはナチュラリストである。彼はある意味で、当時の同時代的なナチュラリストの在り方に一致している。成熟したオランウータンは、市場に売り出されることによってナチュラリストの遠征資金の大きな支えとなった。世界の果てまで珍獣を求めて航海に乗り出した人びとの物語において、動物の獲得は、遠い異郷の地を征服する大英帝国の威信の象徴となった。次節で触れることになる19世紀の博物学者ウォレスを例にとってみても、オランウータンに関する調査はわずかな観察程度にとどまり、もっぱら動物は射殺されて標本にされ無慈悲な採集にその意欲が注がれていた。これが当時のナチュラリストの在り方である。ダーウィンの『種の起源』が出版されたのが1859年、そのすでに4年前、ウォレスは、野生のオランウータンを体系的に研究した最初のイギリス人ナチュラリストとなっていた。ハンス・ブライトマンはこの種のナチュラリストに属する。

ハンス・ブライトマンは、ベルトランから結婚したい女性がいることを打ち明けられ、もしもその女性と結婚するのなら、ビミを殺害せよと忠告する。これに対してベルトランは、家族同然の暮らしをしてきたビミを殺す

などという残酷なことではできないと忠告を無視する。ハンス・ブライトマンが残酷であるかないかの議論は別として、ブライトマンが、ビミを殺害せよという極論的発言をしたのは、ビミのベルトランに対する思いか、あるいはベルトランのビミに対する思いか、ブライトマンから見て両者の関係が「身の毛のよだつ」ような異常な関係であったからだと考えられる。

ブライトマンはビミについて「彼は獣ではなく、人間であった」と回想している。しかしこの言葉を字義どおりに受けとめるべきではない。彼の忠告は、獣の獐狂さを知り尽くしているナチュラルリストの言葉であった。よってブライトマンのこの言葉は、ビミが獣ではなく人間そのものだと思って発せられた言葉ではない。その言葉は、当時、ヴィクトリア朝時代の「動物園」で、人びとが人間とそっくりな動物たちのしぐさに一喜一憂して放った言葉そのものであったことを思い出す必要がある。動物園でオランウータンのジェニーを見たとき、「胸が痛くなるほど人間であった」と述べたヴィクトリア女王は、その時、ジェニーとのあいだに自分とは明確な境界線を引いていたことは間違いない。

人間は動物から進化したとする「人間」を「動物」と等式で結ぶようなダーウィンの進化論によって、キリスト教社会における人びとの認識は大きく揺さぶられた。だが、進化思想は肯定的に受けとめられていく。人びとは、動物と人間との生物学的な同一性を受けとめたのであり、その一方で、つねに動物との差異を模索していた。人間は真の意味で動物ではない、進化系列の頂点に立つもとして存在するのであり、つながりはあっても同一ではないという根本意識の上にあった受容である。

動物園の発想は、創世記のノアの方舟を想起させる。創世記第7章1 - 4節にわたるノアの方舟の挿話は、方舟という限定された空

間に網羅的・組織的に動物を収集する物語であるといえる。それはいわば、雄雌のつがい外界から隔離して収集していることで自然界の保護を再生産の目的とする、近代以降の「科学的動物園」を予兆させるものである(渡辺16)。かつて16世紀にメキシコを侵略したスペインのコルテスは、新大陸アステカ帝国で巨大な規模を誇る動物園を目撃する。そこにはライオンやトラ、オオカミをはじめとする動物から、爬虫類や肉食の鳥類に至るまで、さまざまな生物が収容され、また別棟には、こびと、せむしといった奇形の、いわばフリークスと称されるものたちまで収容されていたと記録されている(Kraits, 62-3)。アステカ人を「人間」扱いせずに略奪の限りを尽くしていたコルテス一行が、侵略先のアステカ帝国で「人間」をも収容する壮大な「動物園」を目にしたことは、コルテス側が、あたかも自身の行為をアステカ人によって反復されているような錯覚に捉われたように思えて二重に興味深い。ルネサンス以降、人間は動物とは完全に一線を画した存在として認識されてきた。むしろそれは創世記以来の人間の願望であったのだろうか。いやそれは、西欧の他者による行為の、模倣的欲望であったのかもしれない。

4. 東南アジアにおける 「オランウータン」の修辞学

オランウータン (orangutan) という語は、マレー語で「人」を意味する "orang" = man と、森を意味する "utan" = woodから成り立っていることから「森の人」を意味するマレー語を語源としていると言われる。「オランウータン」は、何故「森の人」と呼ばれてきたのか。ウォレスの旅行記においても明らかなように、マレー人の中で、オランウータンは「オランウータン」と呼ばれてはいない。まっ

たく違った呼び名が用いられている。スマトラやボルネオのさまざまな民族は、オランウータンをマイヤスと呼んでいる。

では、オランウータンとは何だったのか。ヘルベルト・ヴェントの説によると、もともと「オランウータン」は、沿岸地帯のマレー語、つまりインドネシアのリングフランカ語で「森の人」という意味を表わし、「小人」を意味する「オランペンデク」という言葉と同様の意味に用いられていた「人」を表わす言葉であった。つまり、マレー人が、ジャングルに住む小柄な原住民、例えばスマトラのクブ族、ボルネオのプナン族、セイロンのヴェツダ族などを指すために用いた言葉だったのである。マレー人はみずからを「オランムラク＝移住民」と呼んでいた。このことは、彼らが外からインドネシアに入ってきた異国人であることを示すとともに、「オラン」が猿ではなく人を指す言葉であることがわかる。「オランウータン」は、マレー人が、自分たちの種族と、もともと沿岸地帯や島々に住んでいた原始民族との間に文化的・人種の差異を明確化するために用いられた言葉なのである。ほかに、マレー半島の土着の諸民族を指す言葉に「オラン・アスリ」という言葉もあり、マレー語で真正の土着の人を意味することは英和辞書にも記載がある。

オランウータンという言葉が初めてヨーロッパに知られたのは、1641年、オランダ人の解剖学者ニコラス・テュルブによるものとされるが、マレー人が野生人を称して「オランウータン」と呼んでいることは、1630年頃にヨーロッパに報告されていたようである。テュルブは、アジアとアフリカのジャングルに暮らす人間に似た「動物」の種類をすべて一纏めにして、実は東南アジアの原始人にあてられていた名を付与したのである。

1699年にエドワード・タイソンが、人間とチンパンジーの比較研究を発表し、チンパンジーに、「森の人、野性の人」を意味す

る「ホモ・シルウェストリス」というラテン名をつけた。オランウータンは、その名の意味から「森の人」と呼ばれたかもしれないという指摘もある (Ritvo, 31)。

興味深いのは、西欧の植民地に対するステレオタイプな見方として、「オランウータン」＝「現地人」として立ち現われる差別的な視線は、実は、マレー人の西欧による模倣的視線であったことである。言い換えれば、「オランウータン」という動物名が、西欧のコロニアル・ディスコースにおいて現地人表象とされる以前に、その植民地の現地人が、さらにその地の原住民に対して用いていた現地人表象だったという東南アジアのレトリックである。

東南アジアの原生林にすむ臆病な原始民族は、マレー人において差別化された結果、「オランウータン」、「オランペンデク」と呼ばれるに至る。マレーにおいて獣人がオランウータンとなり、それは類人猿となった。ヨーロッパでピテカントロプスの発見に沸いていた頃、マレー人は、すぐにこうしたヨーロッパ人の関心を悟り、それを利用しにかかったという。

キプリングの「ベルトランとビミ」のテキストには、マレー諸島が物語の舞台とされているにもかかわらず、マレーの現地人はひとりも登場してこない。敢えて言うなら、オランウータンのビミが現地人表象として考えられるくらいだろう。ベルトランと結婚する女は、インド系とフランス系の混血である。

当時、西欧がマレー人というとき、何をもって「マレー人」と呼んだのだろうか。ジャングルに住む原住民も、マレー諸島の住人はすべて「マレー人」だったのだろうか。だとするなら、キプリングのテキストにおいて、ベルトランの妻がビミに殺害されるのは、動物学上のオランウータンに、語源上のオランウータンが殺害される構図を形成する。特権化された者が行使する言語による差異化が、差異

化される者の言語行為の模倣として、逆にアプロプリエイトされたものであるとき、こうした東南アジアの歪んだレトリックがテキストを奇妙な形の植民地言説に近づけている。しかし、動物学上のオランウータンをベルトランが殺し、みずからも自害するテキストの結末は、植民地の言説を越えた、「人間」と「動物」の複雑な関係性を浮き彫りにしていると言わねばならない。

5. <ペット>という制度性 —愛玩のパラドクス—

新婚生活の日がまだ浅いうちに、ベルトランは妻を殺害された。内側から鍵が掛けられた部屋の中で妻は死んでいた。もはや人間の形状を留めずに "stuff" と形容された妻の死体、壁などに付着した身体の一部が散在していること、部屋の天井に突き破られた大きな穴、これらは、妻の殺人犯がビミであることを容易に想起させている。

ハンス・ブライトマンの忠告にもかかわらず、ベルトランは現地の混血の少女と結婚する。だがその前後に、ブライトマンは、自分も含め、ベルトランに近づく者に対して、ビミが如何に嫉妬心⁽³⁾を表わしていたかを目撃している。

ハンス・ブライトマンは、ビミの目に殺害を匂わす光を見るが、その一瞬あとには、ビミの目に殺意の光が消えて従順にベルトランの妻にスリッパを運ぶ姿を目の当たりにする。このときのハンス・ブライトマンの目に映ったのは、「抜け目なく」"so cunning" 振舞うビミの姿であった。ここでも、ブライトマンの目に映るビミの「狡猾さ」は、飼い馴らされることによって隠蔽された本来備わる獣性なのか、人間化されていくプロセスの中で習得された「人間的」狡猾さの模倣なのかわからないのだ。

親子同然の生活を送ってきたベルトランは、

妻をめとるならビミを殺害せよというブライトマンの忠告を聞き入れなかった。ベルトランは、幼獣のころよりビミを育て、ビミを檻の中で「飼う」ことはせず、人間と同じように同じ部屋で暮らし、眠り、朝起きて、煙草を吸い、手に手をとって散歩に出かけた。だが結局、ベルトランが人間の妻をめとったことは、ベルトランのビミに対する愛の形が人間への愛とは別物であったことを示唆している。

しかし一方で、ベルトランは、妻を殺害されたにもかかわらず、遺体を片付けて家を修復し、ビミの帰りを10日間も待ち続ける。ここには愛する妻を殺害したビミに対する復讐心というべきものは些かも見られない。ベルトランは10日後に戻ってきたビミを家に迎え入れると、まるで罪を犯してしまったことに震えているように恐がった態度を見せるビミを、ベルトランは3日間のあいだ愛撫してやったとある。我々は、この "he made love to Bimi" という表現に、ベルトランがビミと愛を交わしたと想像できるほど、ベルトランは、妻よりもビミの方を愛していたと想像できる、ベルトランのビミへの「愛」がうかがえる。しかしこの「愛」は、一体どのような愛だったのか。

ピーター・レイビーは、かつてダーウィンの家の一室に飾られていた大きな絵の中に描かれたウォレスを、「聖フランチェスコを裏返した人物のように見える」(Raby, 9) と述べたことがある。アシジの聖フランチェスコは13世紀イタリアの聖人である。彼については、グッピオという古い小さな都市で荒れ狂っていた背丈のある一頭の狼を手懐けて、住民と和解させたという奇跡が有名な話として語り継がれている。彼はキリストの模倣の理想を徹底的に追求したとして有名であり、自然と向き合うことが神と向き合うこと、という考えのもとに、全生物を兄弟姉妹と呼び、「己を自然の一部と化すことによって、自然

に遍満した神の秘密を嗅ぎ取った」(池上, 127) 人物として知られる。

自然と一体化するのではなく、自然を征服する立場にあったウォレスは、いわばハンス・ブライトマンの在り方と同じであり、彼を「裏返した」人物はベルトランであるといえる。そしてテキストの中でベルトランは、ブライトマンから「アシジの聖フランチェスコのようだ」と形容されている。

ベルトランは「逃亡犯と噂されるナチュラルリスト」である。彼が如何なる理由でマレー諸島に移り住むようになったのかは謎のままである。ただ、彼がナチュラルリストであり、オランウータンと暮らす姿は、同時代ナチュラルリストのウォレスが、マレー諸島でオランウータンを一時ペットとして飼っていたエピソードを想起させている。

ウォレスは、8年に渡る旅行の成果として、1869年に『マレー諸島』という旅行記を発表している。「オランウータンと極楽鳥の地」という副題のもと、彼はアジア産の伝説の類人猿たるオランウータンを徹底的に観察・調査した最初の科学者とされ、動物地理学の基礎を築き進化論の発見に力を貸したとされている。この記録のなかで、彼は1855年5月2日、一頭の雌のオランウータンを射殺した際に生き残っていた、オランウータンの子どもをキャンプに連れて帰り育ててみようという試みた旨が記載されている。この小さな生き物は、好きな食べ物を口にすると満足した表情でウォレスを見上げ、逆に嫌いな食べ物だと「まるで癩癩を起こしている人間の赤ん坊のように」泣き叫んだ。ウォレスは、このオランウータンの行為が人間と類似している点を強調して記述している。進化論初期の時代に、動物が人間のようにふるまっているという記載は、読者のあいだにセンセーションを巻き起こした。

I much regretted the loss of my little pet, which

I had at one time looked forward to bringing up to years of maturity, taking home to England. For several months it had afforded me daily amusement by its curious ways and the inimitably ludicrous expression of its little countenance. (Wallace, 35) (下線引用者)

聖フランチェスコを裏返したようなナチュラルリスト、ウォレスであったが、彼が、子どものオランウータンを持ち帰って育てる経緯は、この場合に限り、テキストのベルトランの在り方と重なる。ウォレスはこの小さなオランウータンを「ペット」呼んでいる。ベルトランの場合、オランウータンを「ビミ」と名付けることにより、ビミはベルトランのペットとなっているといえる。しかしここでは、ウォレスの「ペット」の概念をはるかに超えたレベルでビミは存在している。

ペットは家族ではあるが、血族ではない。動物ということで人間とは異なる種族のものでもある。しかしながら、その動物がペットとなることによって、本来考えられている血族や親族、種族といった境界線がきわめて曖昧化されてしまうことは、ベルトランとビミのケースにおいても明らかである。ましてビミは、普通ペットとして飼われることの多いイヌやネコといった動物ではなく、オランウータンであること、このきわめて人間に近い類人猿が、人間と同棲生活をするという物語そのものが、人間と動物という<種族的>越境性、さらには混淆性を強烈に映し出すモチーフとなっているといえるのである。

『オックスフォード英語辞典』(OED)によると 'pet' は「家畜化された」動物や、「飼い馴らされた」動物として定義されている。ペットは、通常、動物が人間の家族の一員となり、人間から名前をつけられることが多い。そして、その動物をまるで人間であるかのように扱う。「ペット」は、人間と動物とのあいだの区分を曖昧化する傾向にある一

方、「ペットにする」とは「人間を動物として扱う」ことも意味している。ベルトランはビミを、家族の一員として扱っている。これは彼がビミをペットとして扱っていることに他ならない。このペットの概念は、親族関係と非親族関係のあいだの通常の区別、あるいは、親族関係と非親族関係のあいだの区別を愚弄する結果を招きかねない。マーク・シェルが言うように、「どんな種類の動物がペットとなるのか」という問いは、「人間とは何か」という問いに直結している（シェル280）。ゆえに「動物」の表象は、再帰的に人間とは何であるかを示す指標となっているのである。

6. むすび

創世記第2章19章、20章において、ヤハウエ神は土で形作った獣や鳥などの生き物を人間のもとに連れてくる。それは人間が動物をどのように命名するかを見るためである。人間によって名付けられた名が、その生き物たちの名前となる。これは、エデンの園における人間の最初の言語行為が動物に対する命名行為であったことを意味している。有史時代における人間と動物の違いが、第一義的に「言葉による差異化」として成立している（渡辺14）ことの証左となっている。

動物を命名するという行為は、意思疎通のためのコミュニケーション手段と、人間の権力行為としての表象性を持つ。前者はペットとしての動物と人間の関係に顕著であり、後者は創世記から動物園に至る文化的ディスコースと、植民地主義のコンテクストとの関連から浮かび上がる動物と人間の関係であろう。「人間」と「動物」を確実に差異化するイデオロギー装置として君臨した19世紀における動物園。こうした一連の「見世物」産業には、'exhibition' という言語に見られるように、内に持つもの (habeo=to hold) を外へ (ex-) と出していく精神性が内包されている。異国の

ものを自国に持ち込んで展示する「見世物」の情動は、ヨーロッパ人が異国の中に原始性を求める19世紀的ロマン主義的精神を代弁するものであった。このロマン主義が、「'expansion' への専心」という、内なるものを外へ拡張していく運動であった (Nenadic, 213) ことを考えれば、みずからの内に 'hold' している原始性を展示によって外に吐き出していく「見世物」産業は、ロマン主義と植民地主義の屈折した欲望の形を露わにしている。

太古からの生命が満ち溢れる熱帯の森林は、ナチュラルリストたちにとって新たなエデンの園となった。彼らは、あらゆる形態の生命を捕獲し、殺戮することによって帝国のアダムと化し、未開調査と称して生物を撃ち、罨に掛け、皮を剥ぎ、剥製にして保存液に漬け標本化する森の中の科学者であった。

マレー諸島をヨーロッパ化するという前提において、このテキストはヨーロッパ諸国どうしの境界線の曖昧さをうちだすものとなっている。また、「わたし」に話を聞かせるドイツ人ハンス・ブライトマンの語る、フランス語まじりでドイツ語に侵された英語が、テキスト上に言語の混濁性を浮き立たせている。あるいはまた、オランウータンと人間という種族間の境界を越える物語のプロットに、種族をどこかで保持しつつ、親族の枠で動物をとらえる<ペット>という概念を想起させた。ペットの概念によって、人間に対する愛を動物と結ぶという愛と所有の逆説的な関係、さらに、ペットというきわめて人間的な動物が、従来の野生動物と人間との関係にみられる常識をぬりかえてしまう境界を危うくさせる。

キプリングのテキストには、こうしたきわめて近親相姦的なテーマが、ドイツ語に<犯された>英語という、ゲルマン系言語間における近親相姦的な言語によって語られる越境の詩学があるといえるのである。

〔注〕

- (1) アカデミー・フランセーズのカーディナル・ジョルジュ・グラントが主幹を務めたフランス文学辞典を参照すると, "Bertran" と表記される人名は中世においてのみ見られることがわかる (Grant, 66-7)。
- (2) ヤングによる『キプリング辞典』の短編集収録一覧には, "Bertran and Bimi" とあるものの, 同書の短編自体を紹介する項目のページには "Bertram and Bimi" とされ, "Bertran" の 'n' が 'm' に変換されている。同様に, クルークによる研究書においても原題に表記に差異がみられ, 著者による原注においては原題と同じ "Bertram and Bimi" とあるのに対し, 巻末のインデックスにおいては語尾が 'm' の 'Bertram' になっている。
- (3) 古代ギリシア・ローマの文学には, 動物と人間が性的な関係を結ぶ獣姦の話が多くあり, 馬の飼育係が馬に恋をする話, ヤギ飼いがヤギに恋をする話などがあり, 人間と動物が恋をして性交渉を持つものであるが, いずれも動物側の嫉妬により人間が殺害される話であるようだ (Salisbury, 85)。

〔引用文献〕

- 1) Altic, Richard D. *The Shows of London*. Cambridge, Mass.: Belknap Press, 1978.
- 2) Barnhart, Clarence L. Ed. *The New Century Cyclopedia of Names*. vol.1. New York: Appleton-Century-Crofts, Inc., 1954.
- 3) Cherpillod, André. *Dictionnaire etymologique des noms d'hommes et de dieux*. Paris: Masson, 1988.
- 4) Crook, Nora. *Kipling's Myths of Love and Death*. London: Macmillan, 1989.
- 5) Dauzat, Albert. *Dictionnaire etymologique des noms de famille et prenom de france*. Paris: Librairie Larousse, 1951.
- 6) Grente, Cardinal Georges. *Dictionnaire des lettres francaises: Le moyen age*. Paris: Artheme Fayard, 1964.
- 7) Hanks, Patrick and Flavia Hodges. *A Dictionary of Surnames*. Oxford: Oxford University Press, 1988.
- 8) 池上俊一「西洋世界の動物観」国立歴史民俗博物館編『動物と人間の文化誌』吉川弘文館, 1999年
- 9) Kipling, Rudyard. *Life's Handicap, and the Other Tales of My Own People*. London: Macmillan, 1911.
- 10) Kraits, Joseph. Ed. *Animal and Man I Historical Perspective*. Harper & Row Publishers, 1974.
- 11) Nenadic, Stana. "Romanticism and the urge to consume in the first half of the nineteenth century," Masine Berg and Helen Clifford, eds., *Consumers and Luxury: Consumer Culture in Europe, 1650-1850*. Manchester: Manchester University Press, 1999.
- 12) Raby, Peter. *Bright Paradise: Victorian Scientific Travellers*. London: Pimlico, 1997.
- 13) Ritvo, Harriet. *The Animal Estate: The English and Other Creatures in the Victorian Age*. 『階級としての動物 ヴィクトリア時代の英国人と動物たち』三好みゆき訳, 国文社, 2001年
- 14) Salisbury, Joyce E. *The Beast Within: Animals in the Middle Ages*. New York: Routledge, 1994.
- 15) Shell, Mark. *Children of the Earth: Literature, Politics, and Nationhood*. Oxford: Oxford University Press, 1993. 『地球の子供たち 人間はみなくきょうだい>か?』荒木正純ほか共訳, みすず書房, 2002年
- 16) ターナー, ジェイムズ『動物への配慮 ヴィクトリア時代精神における動物・痛み・人間性』斎藤九一訳, 法政大学出版局, 1994年
- 17) ヴェント, ヘルベルト『世界動物発見史』小原秀雄ほか訳, 平凡社, 1988年
- 18) ヴェヴァーズ, G. 『ロンドン動物園150年』羽田節子訳, 築地書館, 1979年
- 19) Wallace, Alfred Russel. *The Malay Archipelago: The Land of the Orang-Utan and the Bird of Paradise, A Narrative of Travel With Studies of Man and Nature*. 10th Ed. Macmillan and Co., 1890. 『マレー諸島: オランウータンと極楽鳥

の国』宮田彬訳，新思索社，1995年

- 20) 渡辺守雄「メディアとしての動物園 動物園の象徴学」渡辺守雄ほか『動物園というメディア』青弓社，2000年
- 21) Young, W. Arthur. *A Dictionary of the Characters and Scenes in The Stories and Poems of Rudyard Kipling, 1886-1911*. London: George Routledge and Sons, 1911.

[Abstract]

Representations of Border-crossing in Rudyard Kipling's "Bertran and Bimi"

Mikako AGEISHI

In the late-19th century, after Darwin published *The Origin of Species*, the borderline between man and beast became more ambiguous than before; therefore, this matter was quite controversial during that period. Rudyard Kipling's short story, "Bertran and Bimi" (1889), reflects these contemporary concerns. German, French and English characters appear in the text located in Malay, but there are no natives except for an orangutan. The German and Englishman talk about a French naturalist, Bertran, who had once lived with an orangutan called Bimi in the same house in Malay. This paper explores the textual representation of man and orangutan in the following sections. Section 1 briefly outlines how Kipling's text is paralleled by the late-19th century situation of the Malayan Archipelago colonized by Europeans. The "exhibited" orangutan is similar to exhibitions like an international exposition, zoo or circus. Section 2 considers how these exhibitions were associated with colonial desires and how people thought of animals. Section 3 examines the reason why the orangutan, apart from its biological resemblance to man, was described as a native person. Section 4 compares the relationship between Bertran and Bimi with the notion of "pet." Once an animal becomes a "pet," it becomes a member of a human family, which means it can be treated as "man," but it remains an animal ethnologically and racially, so "pet" blurs the dividing line between human and animal. Thus, various transgressions of the late-19th century western perceptions can be seen in Kipling's text.

Key words : border-crossing, colonial desire, exhibition, orangutan, pet